

萬葉に於て日本の感情を見る (二)

東京女子高等師範學校教授 石 井 庄 司

一、わらべ心 (つゞき)

○ 大殿おほほのの この廻もよほの 雪ゆきな踏ふみそね しばしばも 降ふらざる雪ゆきぞ 山やまのみに 降ふりし雪ゆきぞ ゆめよるな 人や 踏ふみそね 雪ゆきは

反歌

ありつつも見めし給たまはむぞ大殿おほほのこの廻もよほの雪ゆきな踏ふみそね

この歌は卷十九に出て居りまして、作者は三形沙彌みかたのさみといふ人であります。三方沙彌は藤原房前に仕へてゐた人のやうで、この歌は、房前の語を承つて誦んだものといふことであります。その歌を笠朝臣子君かさあそみといふ人が聞き傳へて居り、更にまた越中國の掾の久米朝臣廣繩くみあそみが傳へて大伴家持おほともりに知らせましたので、家持が書きさめておいたといふことでありませう。この事情でわかりませうに、この歌は始めから文字に書き記されたものではなくて、口から耳へ三歌

ひ傳へられてきたものであります。さういふわけで、この歌にはなんともなく快よい調子があります。さうか繰りかへしてよく讀んで下さい。まことに素朴な歌ひぶりです。「雪やこんこ、霰あられやこんこ」を走り廻つてよろこぶ幼な兒の面影があるではありませんか。

普通の長歌といふものは、五音、七音、五音、七音といふやうに型がきまつてゐるのですが、これはその型にも拘はらず、思ふまゝにぐんぐん自分の感情を歌ひのけてゐます。そんなところは、今の童謡或は民謡なごとも通ふところですよ。大伴家持も聞いて面白いと思つて書き留めておいたものでせうが、たしかに特色のある作です。

さて歌の意味は、藤原房前卿のこの御座敷のめぐりの雪を踏むなよ。さう度々は降らない。珍しい雪だよ。山ばかりに降つて、かういふ都には降らなかつた雪だぞよ。決して雪に近寄るな。人々よ。踏むなよ、雪は。さいふのであります。ぼつり／＼短く切れて居ります。試みに行をか

へて書き改めてみるこ、かうなります。

大殿のこの廻の雪な踏みそね。

しばしばも降らざる雪ぞ。

山のみに降りし雪ぞ。

ゆめよるな人や。

な踏みそね雪は。

これでよくわかりますやうに、長い句と短い句とが交つてゐますが、始めは比較的長く、後になるほど短くなつてゐます。これは感情の昂ぶつてゆく有様をありのまゝに示してゐるものと思はれます。なんの巧みもなく、しかも上手に出来てゐるのであります、かういふところが子供の心と一致してゐるよいと思ひます。

反歌は、長歌の中で歌ひ得なかつたこゝを取り出して歌ふさいふものでありますが、この反歌は大體前の長歌に續いてゐます。この儘でわが主房前卿は御覽になるであらうよ。この大殿のめぐりの雪を踏んではならないよといふので「この廻の雪な踏みそね」は全く前の長歌の初句を繰り返してゐるのであります。「雪は踏むなよ、雪は踏むなよ」を両手を擴げて大事に取り護つてゐるやうな姿までも想像出来る歌です。何處までもわらべ心に通ずるものがあります。かういふ素朴な歌は、卷二十の防人の歌の中にも多く見られます。防人のこゝは既に御承知と思ひますが、「防人

は即ち「崎守」で、東國の若者が遠く筑紫の海岸を防備するために遣された人々であります。今で申せば沿岸防備隊或は國境守備隊といふこゝろです。

○

父母も花にもがもや草枕旅は行くともささごて行かむ

佐野郡丈部黒當

これは遠江國佐野郡の防人で丈部黒當といふ人の作であります。「もささごて」は「ささげて」といふ言葉の訛で、兩手で差しあげていふ意味であります。家に残しておく兩親の身の上を案じて、もし自分の父も母も、あの道ばたに咲いてゐる花であつてくれればよいがな。さうすれば自分は筑紫への旅行中、兩手でささげて行かうものをいふ意味であります。「もささごてゆかむ」といふやうな言ひ方は、如何にも純情な子供の心で、千年の後、なほ深く動されます。

この外、下野國の防人の津守宿彌小黑栖は「おも刀自も玉にもがもやいただきてみづらの中にあへまかまくも」と詠んでゐます。「おもごじ」は「おもごじ」の東國の訛で、「おも」は「母」といふこと。朝鮮の「おむじ」(母)と關係ありとされてゐます。「ごじ」は一家の主婦といふこと、おつかさんが玉であればよいのにな、もし玉であつたなら自分の頭に載いて角髪の中へあはせてまきつけようものをいふ意味で、これまた無邪氣な子供のやうな歌であります。「今日

よりはかへりみなくて大君の醜の御楯も出で立つ吾はに
歌ふ勇敢な東國男子はまた同時に子供のやうな純真な無邪
氣な心の持主であつたさいふこころをしっかりと御記憶ねが
ひたいのであります。

平久佐壯丁を平奥佐助丁を潮舟をの並べて見れば平奥佐勝
ちめり

これは卷十四にある東歌の一首で、作者は未詳であります
が、多分年頃の娘と思はれます。平久佐さいふ村、平奥
佐さいふ村に二人の若者があつたのでせう。それを平久
佐壯丁さいひ、平奥佐助丁さいつたものと思はれます。壯
丁に對して次丁を助丁さいひます、「潮舟の」は枕詞で、並
べるさいふこころを引き出すための語であります。一首の意
味は、平久佐壯丁、平奥佐助丁と並べてみるさうも平奥
佐が勝つやうな氣がするさいふのであります。その結句の
「平奥佐勝ちめり」さいふ「めり」が如何にもうら恥しい娘の
胸中を吐露した言葉で面白いと思ひます。この恥しいさい
ふ氣持はまた子供のやうないぢらしさを感じるものでありま
す。男も女も萬葉人はかういふやさしい心を持つてゐまし
た。しかし以上の例は、いづれも都の文化に遠い東國の人
人のこころでありました。かういふ特殊な例だけで萬葉集の

一般を律することも出来ないと思ひますので次は少し別の
方面を見てみたいと思ひます。

ひさかたの天行あめく月を網あみにさしわが大君おほきみはきぬがさにせ

これは卷三、雑歌の部にある柿本人麿の作で、長皇子が
獵路池の邊の野原に獵にお出でになつた時、お供をして詠
んだ長歌の反歌であります。「天行く月を網にさし」の「網」
は「綱」(つな)の誤ではないかさいふ説がありますが、この
まゝ網(あみ)でよいと思ひます。空にかくる月を網を張つ
てさらへるなさいふのは、全く想像的のこころのやうであ
りますが、この作者は決して單なる譬喩としてではなく、
實感で詠んでゐるのであります。一茶の俳句に「名月をこつ
てくれろ」泣く子かな「さいふのがあります。子供には空の
高さいふこころは考へられないものですから、美しい名月
を取つてくれろ泣くさいふので、如何にもよく兒童の心
理を把握した作品であります。いま人麿の歌にもそれに似
たところがあると思はれます。更にこの歌で面白いのは、
その網を張つて把へた月を皇子はそのまま、御自のきぬがさ
さし給ふさいふのであります。

「きぬがさ」は、身分の高い方々が外出のときに、上から

さしかけるものであります。空の月そのものをきぬがさこするなきこは、全くすばらしい話ではありませんか。

柿本人麿は萬葉集屈指の歌人であるばかりではなく、實にわが國第一の大家であります。その大歌人のものゝ見方、考へ方が全くわらべ心に通じて變りがないといふことは、まごこに意義が深いと思ひます。

○
大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも

これは卷三のはじめにある歌で、持統天皇が雷の岳に行幸遊ばされたとき、供奉の人麿が詠んだものであります。天皇は現人神でましますから、かやうに天雲の雷の上に家居遊ばすこごでありますよといふこごで「雷」は地名として雷岳であり、それと同時に天上の雲の中でまごろく雷神でもあるのであります。この言葉で、天皇に咫尺し奉るありがたくも忝き感激を如實に示してゐます。人麿の作より以前に「大君は神にしませば赤駒のはらばふ田舎を京師さなしつ」か「大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を都さなしつ」といふやうな作もありますが、しかし「天雲の雷の上にいほりせるかも」といふ深い感激と驚異の表現はまだないのであります。これは大家としての人麿の伎倆の然らしめるまごころを考へられます。けれどもその人麿の伎倆

いふのも、全く子供の純なものゝ見方考へ方と一致するものであると思ふのであります。

かうなつてきますと、わらべ心はさながら神にも通ずる心であります。人麿の雷岳供奉の作の如きは、全く日本人としての本然の姿を詠みあげたものでありまして、天皇に對し奉る純一な精神のあらはれであります。

かういふ純一な精神があつて、はじめて海犬養宿禰岡麿のやうに「御民われ生ける駿あり天地の榮ゆる時にあへらく念へば」といふ歌が詠めるのであります。岡麿の歌は、理窟ではありません。あゝだから、かうだからと理詰で考へてきた結論ではありません。わらべ心、子供心で御代をあがめた純真な讚歎の聲であります。本當の心の底から湧き起つてきた純粹でまざりけのない精神であります。私は日本精神或は日本の感情といふものは、幼な兒の感情であると思ひます。

(つづく)